

フェローシップ・ニュース

NO.35号

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 活動報告

JICA（国際協力機構）の草の根技術協力事業（草の根協力支援型）のスキームを使った3年間の事業が5月1日より開始され、その第一弾として5/24～5/30までマニラに行っていました。今回の渡航の主な目的は、このプロジェクトに必要な情報を収集し、関係者とのネットワークを築き、フィリピンのコアメンバーを選出し、ミーティング会場候補地を選定することでした。

本事業開始にあたって、プロジェクトマネージャーである近藤恒夫は、以下のように思いを語っています。「この事業は、当事者をエンパワーメントすることで、助けられた人自身がその経験を次に伝えるという『命のリレー One addict helping another』だ。そして、人のため誰かのためでなく、自分の回復のためにやっていくのだというモチベーションが大切。そして『恨みとコーヒーカップ』があれば仲間は増えていく。ミーティングの仲間と反りが合わなければ分裂してはいけない。そうやって分裂してグループが増えていくことで、助かる人も増えていく。こうした取り組みが、貧困層の中でどんどん広がっていくことを願っている」

プロジェクトメンバーである三浦陽二（沖縄ダルク）は、「日本の薬物依存症者がアメリカの依存症者から助けられてきたように、今度は私たちがその恩返しをする番だ。私たちは人を助けることで自分が救われるのだ」と。同メンバーの山本大（日本ダルク アウェイクニングハウス）は「言葉の障害を越えてメッセージを伝えていくことも我々の使命の一つだ」とこのプロジェクトにかかる思いを語っていました。



キックオフミーティング&セレモニーの様子
前列左から保健省エスカッティン氏、近藤理事長、リッチー氏、JICA山本氏
後列左から三浦、エバングリスタ氏、DDBガラバンテ氏、尾田、保健省レイエス氏

< 第1回渡航スケジュール >

- 5/25(月): JICAフィリピン訪問、キックオフ・ミーティング&セレモニー
- 5/26(火): ミーティング会場候補地視察(ケソン市タロン・ラーニング・センター) ミーティング会場候補地視察 (マリキナ市保健所) ファミリー・ウェルネス・センターと今後の打合せ
- 5/27(水): 日本大使館訪問、コアメンバーの面接(ファミリー・ウェルネス・センター)
- 5/28(木): ケソン市地域裁判所見学、ダマスカス・ファウンデーション見学
- 5/29(金): JICAフィリピン訪問、お別れパーティー

【事業概要】

事業名: マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業

事業の背景と必要性: フィリピンには約200万人の薬物乱用者がいると言われる。その多くは覚せい剤乱用者である。覚せい剤はフィリピンでは“shabu”と呼ばれているが、日本の覚せい剤の隠語である「シャブ」に由来するものである。覚せい剤は、1gあたり約1500ペソであり、100ペソ程度の小さな包装単位でも入手が可能のため、貧困層においても使用が拡大する原因の一つとなっている。日本人が発明した覚せい剤の問題に苦しむ薬物依存症者の回復支援をすることは、薬物乱用の歴史的背景からも妥当性の高いことである。マニラでは回復プログラムにつながる薬物依存症者は富裕層のみであり、貧困層にまでいき渡っていない。日本での回復プログラムの核であるミーティングをマニラの貧困層で開くことにより、誰にでも回復のチャンスがあるということを広く認知してもらう。アパリミーティングが地域で開催されることで貧困層の中でも薬物依存からの回復が可能となる。

事業の目的: マニラの貧困層に薬物依存症者のためのアパリミーティングが開催される環境が整う

対象地域: フィリピン マニラ市の貧困層地域

受益者: 依存症者本人とその家族、その他のワークショップ参加者(リハビリ施設職員、精神病院職員等)

活動及び成果:

1. 本事業を実施する上で必要な現地情報を収集し、中心となるコアメンバー5名を選出する。
2. コアメンバーの本邦研修により、アパリミーティング開催に必要なノウハウやファシリテートスキルを学ぶ。
3. 現地で模擬ミーティング(アパリミーティング)を開催し、地域で薬物依存症についての理解とアパリミーティングに対する理解を深める。
4. ミーティングの際に使用するアパリミーティング・ハンドブックを作成する。

実施期間: 2009年5月～2012年3月(3年)

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2009年7月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次:

フィリピンプロジェクト活動報告	1 2 3
タイ王国における薬物乱用に対する初期介入の取り組みについて2 … 嶋根	4
6・26国際麻薬撲滅デー	5
入寮者からのメッセージ…シュウ	6
藤岡ニュース! ダルク・ソフトボールカップ開催	7
アパリからのお知らせ	8



左がケソン市地域裁判所サラザール判事、右が近藤理事長



ダマスカス・ファウンデーションにてマニラから車で2時間北に行ったバルカン市にあるキリスト教系のリハビリ施設。カナダ、エストニア等世界各国から心理学の学生が集まっています。



ダマスカス・ファウンデーションの施設の壁にペインティングされている平安の祈り



2009・5・26付 まにら新聞

1 フィリピン貧困層の薬物依存者回復支援事業を始めることになった経緯

すべては約5年前、国連アジア極東犯罪防止研修所の教官をしていたある保護観察官から、フィリピンのミンダナオ島にある薬物依存症リハビリ施設が日本に支援を要請しているの協力してもらえないかとの打診を受けたことにはじまります。世界に薬物依存症回復支援の輪を広げようとしていたアパリ理事長、近藤恒夫は、さっそくミンダナオ島にダルク・スタッフを連れて出向き、その際、マニラにも足を運び、ファミリー・ウェルネス・センター（以下、FWCと表記します）代表のリッチー・クリストバル氏とも親交を深めてきました。その後、ミンダナオ島の政情不安のためJICAからストップがかかり、急遽実施場所をマニラに変更して事業を展開することになりました。

実は近藤とリッチー氏との関係は約20年前にさかのぼります。ロサンゼルス郊外のバンナイスで開かれたNAワールド・カンファレンスで、ほとんどアジア人が参加していなかった当時、近藤はフィリピンから参加していたリッチー氏と出会っていました。リッチー氏は「ブルート」こと近藤に非常に親しい感情を覚えてくれていたようです。

その後、ヘーゼルデンなどで研修を受け、薬物依存症のリハビリの専門知識を得たリッチー氏は10年前から、マニラ市内の高級住宅地で富裕層を対象とした入寮型の薬物依存症リハビリ施設を始めます。現在ではフィリピンの民間薬物依存症リハビリ施設協会の会長という要職にあり、また、薬物依存にかかわるフィリピン保健省の高官や、危険薬物委員会（DDB）次官をはじめとする高官らとも親しく交流し、篤い信頼を得ている依存症回復支援の重鎮となっています。FWCはフィリピン政府からも注目され、DDBを退官した研究者が職員として採用されるといったような良好な関係も築き上げています。

アパリでは、正式なJICAとの契約に先立ち、JICAのアドバイザー派遣制度を利用させていただきました。昨年11月19日～25日にFWCとアパリとの間で業務提携契約を結ぶために法律英語の専門家として森村たまき氏（国土館大学法学部講師・翻訳家）をアドバイザーとしてマニラに派遣する機会をいただいた際、アパリストaffも同行しました。

このときの森村氏の最大の功績は、たぐいまれなる交渉力と社交性を発揮して、ケソン市のタタロンで貧困層を対象としたの薬物依存者回復支援を行っているNGO、アディクタス・フィリピン代表のレオナルド・エスタシオ氏（フィリピン大学准教授文化人類学専攻）をリッチー氏に紹介できたことでしょう。エスタシオ氏については、渡航直前に、嶋根卓也氏（国立精神・神経センター）から紹介され、現地到着後、アパリのプロジェクトの説明をした上で協力者になってもらうことになりました。リッチー氏とエスタシオ氏の交流は、本プロジェクトの射程を超えて、フィリピンの富裕層と貧困層支援者が結びつくという大きな意義がありました。貧困層支援の情熱はあっても具体的な支援方法を知らなかったFWCと実際に貧困層支援をしているが効果的なプログラムを取り入れていなかったアディクタス・フィリピンとが手を結ぶ手伝いができたのです。



2009・5・28付 Malaya Living

また、治療を重視した「私設ドラッグ・コート」と呼べるような裁判実務を続けておいでのケソン市地域裁判所サラザール判事と巡り会うことができ、エスタシオ氏と共に本プロジェクトに参与していただけたこと大きな収穫でした。

2 キックオフ・ミーティング&セレモニー 5月25日(月)

この式典は、関係者に対しこのプロジェクトの概要を説明すること、貧困層の依存症者支援に対する理解を深めてもらうこと、そして協力をいただけるよう親睦を深めることを目的としていました。参加者は保健省、危険麻薬物委員会（DDB）、教会関係者、リハビリ施設職員の方々、そしてFWC職員、リッチー氏とそのご家族、総勢50名ほどでした。

長い年月のあいだ、リッチー氏を始めアドバイザーの森村氏など多くの方々に関わり、ご協力いただいたお陰で、キックオフ・ミーティング&セレモニーは大変意義深いものとして終えることができました。この場を借りまして感謝申し上げます。

<式次第>

- ディンゴ・クリストバル牧師(リッチー氏の兄)による祈り
- 出席者紹介(リッチー氏)
- アパリの活動と本プロジェクトの概要についてのプレゼン(尾田事務局長)
- 日本ダルク アウェイクニングハウスの紹介(山本施設長)
- FWCの紹介(リッチー氏)
- アディクタス・フィリピン代表エスタシオ氏の挨拶
- レニー・クリストバル氏(リッチー氏の父親でFWS理事)の挨拶
- JICAフィリピン事務所の山本氏の挨拶
- エル・ラザーロ司教の挨拶
- 危険薬物委員会(DDB)ガラバンテ氏の講演
- 保健省エスカッティン氏の挨拶
- FWC理事長エバンゲリスタ氏の挨拶
- 近藤恒夫の挨拶

[http://www.jica.go.jp/
topics/2009/20090612_02.html](http://www.jica.go.jp/topics/2009/20090612_02.html)

この模様は、地元の新聞社2社から取材を受け掲載されました。また、JICAホームページでも紹介されました。

3 アパリ・ミーティングの候補地の選定 5月26日(火)

タタロン・ラーニング・センター視察

ケソン市にはタタロンという貧困地域がありますが、エスタシオ氏の運営するアディクタス・フィリピンの指導の下に子どもたちに薬物の一次予防教育を実施しているタタロン・ラーニング・センターのイブリン・ガーラン女史をAPARI代表団、リッチー氏と共に訪ね、現地の視察をするとともに、ミーティング会場の候補地として利用するための調整をしてきました。

マリキナ市保健所視察

マリキナ市はマニラの郊外にある都市です。以前よりFWCはマリキナ市の保健所と、薬物乱用防教育のためのパネル展示等の啓蒙活動で協働関係を持っていたのですが、このたびアパリとのプロジェクトにおいてマリキナ市の保健所をミーティング会場として無償で貸与いただけないかという件について打ち合わせに伺ったところ、ご快諾していただきました。

4 コアメンバーの選出 5月27日(水)

午後2時から、FWCにおいて、日本で2週間の研修を受けマニラの貧困地域においてアパリ・ミーティングを開くファシリテーターとなるための候補者男性6名、女性1名の合計7名をアパリ側スタッフ全員で面接しました。自助グループ参加歴の長いダルクのスタッフたちは様々な観点から鋭い質問を重ね、今回ひとまずコアメンバー4名を選出することができました。

5、今後の予定

2009年9月4日から2週間、フィリピンのコアメンバー3名が本邦研修に参加するため日本に来ることになっています。研修の目的は、上野にある日本ダルク、藤岡のアウェイクニングハウスに滞在しながら、自助グループに通うなど日本の回復施設と自助グループの活動を体験を通して理解を深めてもらうことです。その他にも多様なワークショップを企画しています。



キックオフミーティングでのプレゼンの様子(尾田)



タタロン・ラーニング・センターのスタッフとともに



タタロンの子供たちと近藤理事長



左から二番目が保健所の所長



コアメンバーの面接風景

タイ王国における薬物乱用に対する初期介入の取り組みについてpart2.

嶋根 卓也

(国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部/アパリ非常勤研究員)

フェローシップをご覧のみなさま、こんにちは。

若年者の薬物乱用に対する初期介入の取り組み事例を把握するため、私は昨年10月にタイ北部チェンマイ県を訪問いたしました。前回に引き続き、今回は地域や学校での取り組みについてご紹介したいと思います。

1、地域での取り組み

今回訪問したチェンマイ県サンパトーン郡の村では、地域全体で薬物乱用を予防し、乱用者については早期に発見し、早期に医療機関につなぐための工夫を聞くことができました。

(1) ヘルスセンターとヘルスポランティア

タイの地域には、診療所機能を兼ねた保健センターが設置されています。保健センターには公衆衛生士(日本の保健師に近い職種)が配置されており、ヘルスケアワーカーや看護師が試験を受けてこの職に就く場合が多いそうです。主たる仕事としては、地域におけるヘルスプロモーション、予防接種、蚊など害虫のコントロール、健康教育、サーベイランス(調査)などが挙げられます。

今回、私が訪問した保健センターでは、有給職員に加えて、数多くのヘルスポランティアと呼ばれる地域住民が活動しているそうです。特に興味深いのは、大人のヘルスポランティアの子供や親戚で構成されるユース・ヘルスポランティアが大勢活躍していることです。

ユース・ヘルスポランティアが扱うテーマは、運動、栄養、感情、環境、福祉、アディクションの6分野です。アディクションの中には、喫煙、飲酒、薬物乱用に加えてギャンブルも含まれます。具体的な活動としては、村の寺院などで健康に関するワークショップを開催したり、ローカルラジオで住民に情報提供をします。私が訪問した際は、ヘルスセンターに隣接する会議室で次回のワークショップの打ち合わせをしました。打ち合わせに同席させていただいた際に、「どうしてヘルスポランティアをはじめたの?」という質問を何名かのユースに尋ねたところ、「人々の手助けがしたいから」、「この活動は自分の人生にとって良いことだし、友達と一緒に活動するのが楽しいから」、「自分たちの村を良くしたい。より健康的にしたいという気持ちがあるから」と目を輝かせながら、そして少し恥ずかしそうに答えてくれた姿がとても印象的でした。

(2) X-RAYプログラム

X-RAYプログラムは、2003年からはじめられた薬物乱用に関わる国家政策の一つです。X-RAYといっても、レントゲン車による結核検診ということではありません。これは、コミュニティの中から薬物乱用者を探し出し、医療機関につなぐためのプログラムです。村の集会などの場で、コミュニティリーダーは「この村の中で、薬物を使っている人を知っているか?」と村人に呼びかけます。もし知っている場合は、その名前を紙に記入し、投票箱に入れます。開票後、名前が書かれた人はコミュニティリーダーによって尿検査が行われます。陽性反応が出た場合は、郡立病院のメンタルヘルスユニットが主催するトリートメントキャンプに参加する必要があります。これはライフスキルトレーニングを中心とする5日間の治療プログラムで、精神科看護師の他、警察や僧侶もファシリテーターとして参加するようです。

このX-RAYプログラムは、年に2回行われるようで、プログラム実施にあたっては、地元の警察、寺の僧侶、村の治安担当者、ヘルスセンター職員、ヘルスポランティアが協力します。

2、学校での取り組み

青少年に対する取り組みとしては、やはり学校が重要な拠点となります。そこでメンタルヘルスの予防や治療に力を入れている学校を訪問させていただきました。今回訪問した郡立チョームトーン学校は、創立48年の公立学校で、総生徒数1767人の大規模な学校で、13歳から18歳までが在籍しています。

(1) メンタルヘルススクリーニングとカウンセリング

チョームトーン学校で、生徒のメンタルヘルスに詳しい2人の教員から、学校におけるメンタルヘルス分野の取り組みについて伺うことができました。まず、タイでは、生徒のメンタルヘルスに関して、教育省(文部科学省)と公衆衛生省(厚生労働省)が協力し合うシステムがあるそうです。扱うテーマとしては、生徒の攻撃性・暴力性、行動障害、薬物乱用、家族問題などを挙げられていました。

生徒のメンタルヘルスの問題を見つけるために、チョームトーン学校では、統一されたスクリーニングテストを採用しています。スクリーニングテストは、教師による評価、生徒の家族による評価、そして生徒自身による評価の3種類あり、教師が評価する場合は、最低1ヶ月間の観察期間を設けています。スクリーニングテストの結果を裏付けるため、家庭訪問を行う場合もあるそうです。チョームトーン学校では経済的に困難な生徒に対して奨学金の支給も行っており、この家庭訪問は、生徒の経済状況を確認する目的もあるそうです。

このスクリーニングテストにより、生徒のメンタルヘルスのリスクの程度を評価し、リスクの程度に応じて、カウンセリングなどを実施します。チョームトーン学校には、教員110人がおりますが、そのうち約60人がカウンセラーの資格を持っているそうです。カウンセラーの資格といっても、日本の臨床心理士のような厳密な資格ではなく、郡立病院が主催する2日間のトレーニングコースを修了した教員に対して修了証を出しているそうです。トレーニングの実施は、郡立病院の臨床心理士、医師、精神科看護師などの専門スタッフが担当します。

教員による対応が難しい場合は、連携医療機関である郡立チョームトーン病院のメンタルヘルスユニットから精神科看護師が派遣され、校内で個別カウンセリング、グループカウンセリング、家族プログラムなどを提供しています。薬物乱用については、学校内で教員による尿検査が実施される他、精神科看護師がファシリテーターとなって、認知行動療法をベースとするマトリックス・プログラム(全12回)が提供されます。



ユース・ヘルスポランティアのみなさん



チョームトーン学校教員と精神科専門看護師(校内)



校内に設置されているフレンド・コーナー



フレンド・コーナー委員による啓発ポスター(フレンド・コーナー内)

校内での対応が難しいケースは医療機関の受診を促しますが、具体的には、発達障害、学習障害、薬物乱用、精神障害、セクシュアリティに関する悩み（例えば、性転換手術を望んでいる場合など）、機能不全家族などが多いとのことでした。ADHD（注意欠陥・多動性障害）、摂食障害、自傷行為のケースはほとんどみられないとの話も伺いました。

（２）To be number oneフレンド・コーナー

校内では、生徒たちによる生徒向けの取り組みも行われています。To be number oneフレンド・コーナー（以下、フレンド・コーナー）は、タイ王室プロジェクトの一環で行われている薬物乱用活動の一つです。フレンド・コーナーの目的として以下の3つが挙げられています。

薬物乱用など健康上問題のある若者あるいは、援助が必要な若者のために、専門家またはトレーニングを受けたピアカウンセラーから、適切なアドバイスを受けること。

若者が問題解決するために、ピアカウンセラーと問題を共有したり、問題解決スキルやEQ(Emotional Intelligence Quotient:心の知能指数)を向上させたりすること。

若者が自由時間を有効に使うため、様々な文化的活動（ダンスや歌など）に参加し、幸せを手に入れるためのスキルを獲得すること。

チョームトーン学校でのフレンド・コーナーの具体的な活動内容としては、以下の7つが挙げられます。

個別カウンセリングを提供する。（薬物乱用以外の相談も広く一般的に受け付ける。最初から薬物乱用のことを相談しにくくても、まずは信頼関係を作るところから始めることが大切）

学校を代表して、コンテストなどの学外活動に参加する。

学校内でリーダーを養成し、行動変容キャンプを運営する。

校内放送、地域のローカルラジオで、薬物乱用に関する正しい知識を普及させる。

薬物乱用に関する情報をポスターにして廊下等に掲示する。

フレンド・コーナーのメンバーを増やすためのキャンペーンを実施する。

フレンド・コーナーの運営資金を増やす。

個別カウンセリングを提供するピアカウンセラーは、教員および外部講師（精神科看護師など）のトレーニングを受けた約30名の生徒（多くが16-17歳の上級生）です。トレーニングでは、相談を受けるにあたっての倫理面などについて学びます。

今回は、地域や学校が一体となって薬物乱用を予防し、薬物と関わりを持ってしまった人に対しては、早期に治療的な関わりを行う様々な工夫が行われていることをご紹介します。次回は、薬物乱用者のレポートシステム（ボ－・ソー・トー）についてご紹介したいと思います。ありがとうございました。

6・26国際麻薬乱用撲滅デー 都民の集い

全国一斉に実施している「ダメ・ゼッタイ」普及運動（運動期間：6月20日～7月19日まで）の街頭キャンペーンとして、平成21年6月21日、JR新宿駅西口広場イベントコーナーにおいて「6・26国際麻薬乱用撲滅デー」都民の集いが開催され、アパリもこのイベントの薬物乱用防止啓発トークライブに協力しました。

イベントは司会挨拶とダメ・ゼッタイ君の紹介、主催、共催、来賓の紹介、そして主催者である東京都福祉保健局健康安全部奥沢康司氏による挨拶からはじまりました。

その後、杉並高校吹奏楽部による演奏。全日本高等学校吹奏楽大会において準優勝の杉並高校吹奏楽部は地域のイベントでの演奏やJICAでのボランティア演奏など国際交流にも力をいれた活動をしており、このイベントでも素晴らしい演奏で聴衆をひきつけていました。続いて警視庁鑑識課、警察犬第二訓練所の鑑識課員と警察犬（ポイド号）により、麻薬臭のある複数の衣類やバッグの中から、麻薬のにおいをつけた布を探し当てるデモンストレーションが行われ、警察犬が見事探し当てると観衆から歓声が上がっていました。

次にトークライブとなり、吉本興業の若手芸人「ハリガネロック」の司会進行のもと、吉本若手芸人「タカダコーポレーション」や「キャベツ確認中」が薬物にまつわるコントをおこなった後、大学生1名、高校生3名と国立精神・神経センター精神保健研究所 薬物依存研究部 嶋根卓也医学博士、APARIスタッフによるトークコーナーへと進んでいきました。

トークのテーマとしての、「薬物についてどの様なイメージをもっているのか？」「身近な問題として認識しているか？」「薬物乱用を繰り返すとどうなるのか？」「誘われた場合どのように断れるか？」などを30分にわたり、ディスカッションを行いました。学生達もこのトークにより、「薬物は関係の無いことと考えるよりも身近に迫る危険性があると捉えていたほうが、より薬物の危険性から回避できる」など、さまざまな角度から薬物乱用問題に対して考えをもつような話をしていました。

最後に、杉並高校吹奏楽部3年生神林ゆき乃さんによる、平成21年度「薬物乱用撲滅宣言」を行い、イベントは終了しました。

EQ(Emotional Intelligence Quotient)とは情動指数を指し、「心の知能指数」と呼ばれます。自己認知力、心内知性、対人関係知性(コミュニケーション能力)、自己統制力、状況判断能力、共感性、柔軟性などの観点から総合的に測られます。

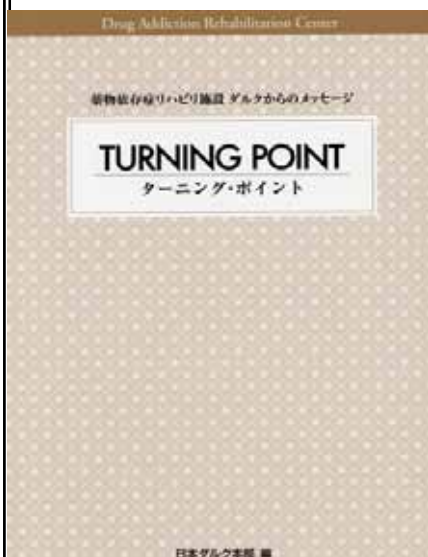
アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

「2回目の藤岡で」

シュウ

ターニング・ポイント

受刑経験のある
ダルクスタッフによる
最新の体験談
12名の体験談と漫画
体験記が載っています



1,000円

ご希望の方はご住所、
お名前、電話番号をご
記入の上お申込下さ
い。
FAX : 03-5830-1791
メール: info@apari.jp

「薬物依存」 DVD

販売を終了しました。

私は今回が2回目の藤岡での生活になります。

前回入寮したのは2005年の2月でした。通っていた大学を自主中退し、自暴自棄になっていた私は家を飛び出し、万引きをした書籍をインターネットオークションで売買し、生活費と薬を買うお金を得ていました。1ヶ月程ネットカフェ難民のような生活をしていましたが、どうしても柔らかいベッドの上で寝たくなりやむを得ず実家に帰りました。家の中へ入れてもらえる条件はただ一つ、「ダルクへ入寮する事」でした。私はそれを受け入れ、自宅に戻る事にしたのです。

初めての藤岡での生活はそれなりに楽しいものでした。周りにいる仲間は皆温かく私を受け入れてくれましたし、施設は自由で、酒を飲みたい人は飲み、薬を使いたい人は使っていました。もちろんスタッフに見つかれば注意をされたり、生活費を支給されなくなったりするなどの罰を与えられたりしましたが、その頃の施設はまだ決まりが緩かったのだと思います。私はその中でも真面目に生活し、クリーンな状態でした。一日も早く退寮し、また外で薬を使おうと思っていました。そのためには施設のルールを守り、役割をしっかりとこなし、誰からも文句を言われぬようにと考えていました。薬物への欲求は毎日のように強く私を支配していました。ミーティングに出ても「一日も早く退寮して薬を使いたいと思います。」と正直に話していました。そんな私を見て、「また使ったら死んじゃったり、刑務所へ行く事になっちゃうよ。」とアドバイスしてくれる仲間もいましたが、私は耳を貸しませんでした。

結局、私は2005年の11月に円満退寮し、退寮したその日に貯めていったお金で覚醒剤を買い再使用してしまいました。一人暮らしを始め就職もしましたが、毎日ブロンを飲んでいる始末でした。勤めていた会社は3ヶ月でやめてしまいました。覚醒剤を使い家に引きこもってしまい、無断欠勤を繰り返してしまっただけです。それからというもの、毎日のように万引きをして生活費と薬を買うお金を稼ぐという以前の生活パターンにまた戻ってしまったのです。

しかし、そんな生活は長続きするはずが無く2006年9月に警察に捕まってしまいました。私は執行猶予中だったので、「これでもう刑務所へ行く事が決まってしまった・・・。」と随分ショックを受けました。

刑務所での生活が始まりました。単調な作業と人間関係のストレスが私を悩ました。私が居た雑居房では、いじめが酷くて若い同囚が年配の受刑者に対して殴る蹴るを当然のように繰り返した拳銃に、小便を貯めた桶を差し出して「これで顔を洗え！」などと命令していました。私はいじめの矛先が自分に向けられないように黙ってそれを見てみてもみぬ振りをしていました。こんなところは一日も早く出所したいとひたすら願い続けました。一日一日を淡々とこなしながら2009年3月に2年4ヶ月に及ぶ受刑生活を仮釈放という形で終えました。

受刑中からも両親からは「身元引受人にはならない。」と言われ渡されていて、仮釈放を願うのであれば、ダルクに身元引受人になってもらうしかないと言われ半強制的にダルクに繋がられる形となりました。

そうして2回目の藤岡での生活をスタートさせました。藤岡の施設は施設長が変わり、建物の外装も内装もリフォームされすっかり綺麗になっていました。ルールが以前と比べて厳しくなった面はありますが、仲間の中にお酒を飲んだり、薬を使ったりしている人は私が知る限り一人もいません。施設では仲間とともにお互いに配慮しながらみんなで関わりを持ちながら回復していこうという空気にあふれるように感じました。仲間はやはり皆温かく私を迎え入れてくれました。その仲間達と薬を止めながら人間らしい生活を送れている事に喜びを見出していこうと思っています。

今現在、私は施設で食事当番を担当する事になりました。まだ分からないことだらけですが、一つ一つ覚えていきながら仲間と協力しながらみんなに美味しいものを食べてもらえればと思っています。

施設の内外で毎日行われているミーティングも大切なプログラムの一つです。その場では仲間の話を聞く事が出来ますし、自分の話をする事で、「今、自分が何を考え生きていて、これから何処へ向かおうとしているのか？」を言葉にする事で自分で再確認する事が出来るからです。仲間の話の中には示唆に富んでいたりと、考えさせられるような材料が色々と詰まっています。

そうした気付きを日々、与えられながら仲間とともに回復に向かって行けたらと思い毎日を過ごしています。



藤岡ニュース！



こんにちは、日本ダルク アウェイクニングハウスの山本です。
山の上もゼラニウムの花が満開で、凌ぎ易い季節となって来ました。
ここ藤岡の施設では何故か音楽をやる仲間が多く集まって来ます。僕たちスタッフも仲間たちと一緒に週末はバンドの練習をします。アディクトにとってシラフで音楽に接することは回復にとって非常に大切なことです。僕自身も以前は音楽に携わった仕事をしてきたので、音楽の持つパワー、癒し的な効果、影響は非常に大きいと実感します。
さて、ここからは僕の妄想なのですが(笑)、いずれはプログラムの一環として、藤岡の仲間たち全員で何かを演奏する機会があればいいなあと思っています。しかし、その為には楽器がどうしても必要です。皆様のご家庭の倉庫に眠っている使用してない楽器(トランペット、トロンボーン、木琴、弦楽器、etc.....)、どんなものでもあれば、是非ご献品をお願いします。決して急いではないので、何かあれば私たち日本ダルク アウェイクニングハウスにご連絡、もしくは送っていただければ嬉しいです。

どうか宜しくお願い申し上げます。

日本ダルク アウェイクニングハウス
ディレクター 山本 大

2008.4月～2009.現在までに<献金をいただいた方>
深野圭介様、山本文代様、都筑義明様、加藤ちえみ様、小山久須美様、石井照明様、木下登志子様、相良桂子様、永島克子様、須賀歌子様、ジョイラック舞唱コンサートの主催者様、浅岡信様、吉田泰隆様、高梨佳子様、鈴木繁雄様、安富良和様、高作義明様、匿名希望の皆様 (順不同)

2008.4月～2009.現在までに<献品をいただいた方>
木下登志子様、深野圭介様、奥田保様、猿渡順一様、安富幸子様、渋川市北橋町更生保護女性会の皆様、理香ペリー様 (順不同)

ありがとうございました！！

ダルク・ソフトボールカップ

6月5日(金)、朝から雲行きが怪しく、いつ降り出すかわからない状況の中、荒川河川敷において第1回ダルク・ソフトボールカップが開催されました。この開催の目的は、ダルク同士の親睦を深めるため、関東近郊のダルク10施設が集まりました。参加したダルクは、東京ダルク、日本ダルク、横浜ダルク、川崎ダルク、日本ダルク アウェイクニングハウス、日本ダルクトゥ バッターボックスに立つ近藤デイハウス、千葉ダルク、埼玉ダルク、山梨ダルク、ダルク女性ハウスでした。ダルク創設者の近藤恒夫は全試合のバッターボックスに立ち、ヒットを連発していました。



大会実行委員長の高橋仁(日本ダルク)は、「ソフトボール大会の交流によって、経験と力と希望を分かちあうことができました。」と話していました。途中小雨もパラパラ降りましたが、全試合を無事終えることができました。そして皆がとても楽しそうに生き生きとした表情をしていたのが印象的でした。結果は、1位：川崎ダルク、2位：山梨ダルク、3位：東京ダルク、4位：アウェイクニングハウスでした。



アウェイクニングハウスの仲間たち

ドラッグ・ダイヤル

最近若い人からの大麻の相談が増えています

こんな質問が多いです。
「何で大麻はダメなの？」
「どんな害があるの？」
「止めようと思うんだけどどうすればいいの？」

どうぞお気軽にご相談ください。
(プライバシーは固く守られます。)

電話相談は
月～金の10時～18時
：03-5830-1790

メールでの相談は随時受け付けています。
メール：info@apari.jp



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部

〒110-0014
東京都台東区北上野2-2-2
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター

(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
- 2、男性(年齢制限なし)

【入寮期間】

基本的に13ヶ月

【入寮費】

月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成21年7月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

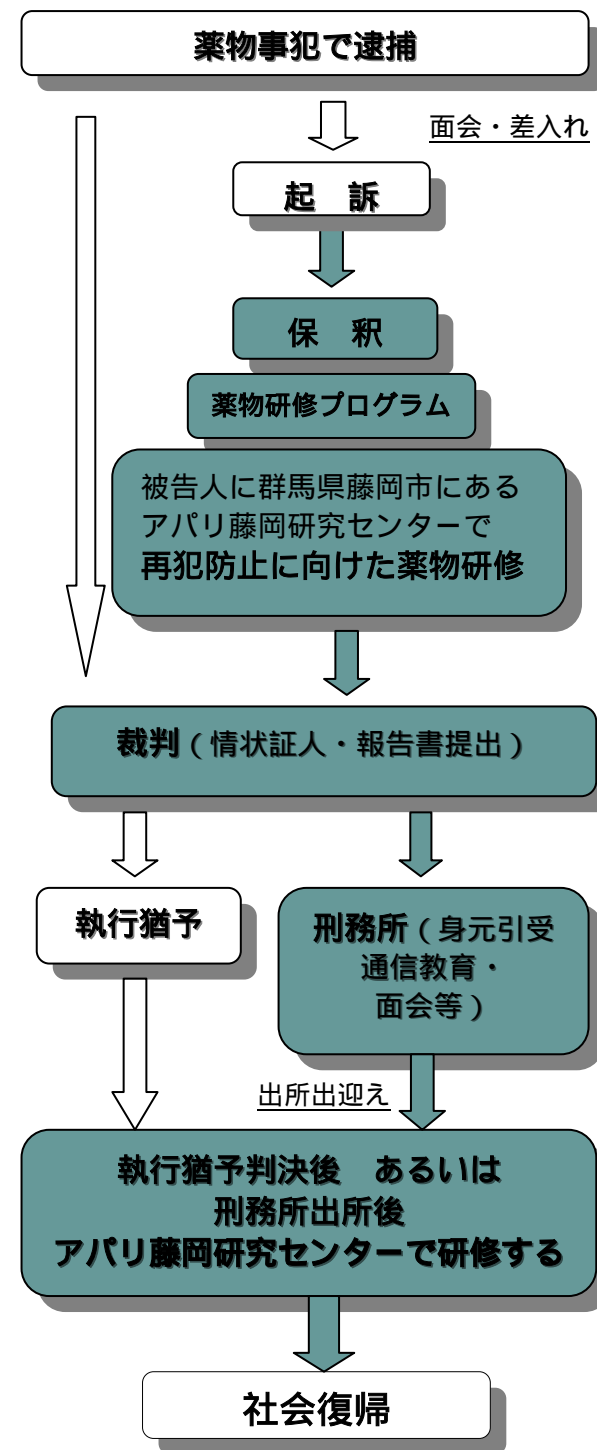
薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**5%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



<アパリ・家族教室> 6月より第4月曜日も開催します

日時	テーマ	ファシリテーター
7/6(月)	境界線とは	町田 政明
7/20(月)	薬物とウツ	町田 政明
7/27(月)	体験談、ステップについて	神田 博之
8/3(月)	愛と共依存～何が間違っていたか?～	町田 政明
8/17(月)	今すぐには行動できない自分	町田 政明
8/24(月)	体験談、ステップについて	神田 博之

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

【日時】第1・第3・第4月曜日18:30～20:30(祝日も開催します)

【場所】アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)

【内容】ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。【予約】不要です

【お問合せは東京本部まで】

<個別相談・カウンセリング>

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円

【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明[元神奈川県立せりがや病院勤務、ホープビル代表、寿アルク理事]

【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。【お問合せは東京本部まで】